



TITLE:

史記李斯列傳を読む

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

CITATION:

宮崎, 市定. 史記李斯列傳を読む. 東洋史研究 1977, 35(4): 593-624

ISSUE DATE:

1977-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153645>

RIGHT:

史記李斯列傳を讀む

宮 崎 市 定

- 一 緒 言
- 二 起承轉結の型
- 三 上書五通の出處
- 四 趙高とその三人の仇の物語
- 五 荀子とその三人の弟子の物語
- 六 結 語

一 緒 言

中國のヘロドトスと稱せられる司馬遷の「史記」は、今日の考から言えば歴史であり、しかも歴史の祖と見られるのであるが、併しそれは祖であるだけに、まだ純粹の歴史になりきっていなかった。特に列傳の部分は多分に文學的なものであり、言いかえれば創作された箇所を多く含んでいるのであって、同時にそこが千古の名文として持て囃される所以でもある。いわば科學としての歴史學と、藝術としての文學がまだ十分に分離していなかった時代の試作であつたと見る事が出来る。だから「史記」そのものを研究の對象として、その性質を捉えようとするとき、今日の歴史學の方法を用いて考證したり、分析したりしようとしても、そんなことで易々と手におえる代物ではない。史記がどのような史料に基づき、それがどのような標準で取捨選擇され、どのような手續により按排されて、現在のような形になったかを、これか

ら問題にしたいのであるが、私は先ずこれを文章の問題として處理した上で、歴史學的な考證に論を進めて行きたいと思う。そしてこのような考察を施すに最も適當なのは、卷八七、李斯列傳であつて、この卷を解明することによって、他の部分の性質もそこからその大概を類推することができると思われるのである。

李斯列傳が私の研究の目的に有利な點は、李斯の生存年代が、歴史家司馬遷から適度の時代間隔をおいている所にある。李斯は前二〇八年に死んでおり、司馬遷はそれから約百二十年程を経て、前八六年に歿している。大約一世紀の歲月は、歴史事實を純客觀的に眺めるために十分な間隔である。殊に司馬遷は漢代の人であるから、漢代の歴史については史料を獲易い一方、專制政治の束縛の多い下において、自由な發想を妨げられ易い立場に置かれてゐる。然るに李斯は秦代を代表する人物であつて、司馬遷にとっては異代の人であるだけに、何等の制限を蒙ることなく筆を運ぶことができる。そして漢代に接する直前の時代であるだけに、漢代を除けば最も史料を入手し易い便宜がある。このような條件の下で司馬遷は、如何なる方法で、如何なる人間像に李斯を描いたかは、何人にとつても興味ある問題たるを失わぬであらう。

二 起承轉結の型

「史記」の列傳七十卷について、文學的に最も形式の整齊完備するものを求むるならば、李斯列傳は必ずその一に數えられるであらう。何となればこれを讀んで先ず感ぜられることは、全體として中國に固有なリズム、起承轉結の四段の起伏に従つて展開されて行く特色があるからである。

李斯列傳の主要部は四段に分れ、最初の起の部は彼の修業時代から、秦に入つて惡戰苦闘の末に始皇帝の信任を勝ちとるまでの經緯を敘し、これをうけた第二段の承の部では、彼が始皇を助けて天下統一の大事業を達成するに參劃し、丞相となつて朝廷の大權を委囑され、位人臣を極むる榮譽に浴した得意絶頂の時代を取扱う。併しながら始皇帝の突然の死去によつて、政局が急轉直下すると共に、彼の生涯も一大轉機に直面し、ここに第三段の轉の部が出現する。ここで彼は宦

官趙高の甘言にのせられて方針を誤り、始皇の長子、扶蘇を退けて、少子胡亥を二世皇帝に擁立する。さりながらその結果は大凶と出て、彼の悲惨な破滅に終るのが、第四段の結の部である。後に論證するための必要から、この四段の概要を、もう少し詳しく此處で紹介しておく方が便利であろう。

起の段 ここに颯爽として登場するのは、立身出世の野心にもえ、進取の氣象に富んだ青年、李斯である。現今の河南省の上蔡縣の生れであるが、當時この地方は楚國に屬していたので、列傳には楚の上蔡と言っている。年少にして郡の小吏となったとあるが、果して楚の時代に、上蔡邑を監督する郡があつたか、あつたとすれば何處であつたか、我々は知ることができない。司馬遷が郡の吏と言つたのは、恐らくこれによつて李斯が、相當な身分、少くとも地方指導者階級の末端に位し得る背景を持っていたことを示したかったのであろう。

郡衙門における小役人の李斯青年は、そこで役所内を走りまわる鼠を觀察した。厠に住む溝鼠は不潔を食ひ、榮養が悪く瘠せこけている上に、絶えず人や犬の近付くのを警戒して、びくびく神經を尖らせている。一方倉庫の中に巢くう家鼠は、滅多に他から驚かされる心配がなく、たらふく穀物にありついて丸々と肥っている。そこで李斯は、鼠がその環境に従つてこのように生活上の苦樂に違いができるものならば、人間は猶更のことであらう、郡衙の小役人などは長く居るべき地位ではないと、見切りをつけて立ち去る。

現今山東省の嶧縣のあたりは、當時楚に屬して蘭陵邑があり、名だたる大儒荀子が、春申君に用いられて蘭陵令となり、職を罷めて後も居を定めて住んでいた土地である。李斯は蘭陵に赴いて荀子の門人となつたが、その意のある所はもちろん、儒學の奥義を極めることではない。實際の社會に役立つ帝王の術を學んだとある。自己の學問に自信を持つに至つた頃、仕官を思い立つたが、當時の楚國は春秋以來の舊國であるが、既に頽廢に陥っており、その才能を伸すべき見込みはない。此等の國に比べて成長株として囑望さるべきは西方の未開國、秦を描いて外にない。そこで荀子に暇を乞うて、西に向つて秦に入った。

この李斯の決心について、師の荀子がどんな態度を示したか、何も書いてない。併し事によれば李斯のこの行には、本意ながらも荀子が紹介状を與えるくらいのことをしたかも知れないと思われる。というのは荀子は本來、趙の人であり、當時の秦における實力者の呂不韋は商人として長く趙に留ったことがあったからである。とまれ李斯が秦に入ると、たまたま莊襄王が死んで（前二四七年）、子の政、後の始皇帝が十三歳で王位に即いた。この人は趙で生れ、呂不韋の保護を受けることが多かったので、呂不韋が擧げられて相となり、文信侯に封ぜられて全權を委任された。李斯は首尾よくこの文信侯呂不韋に取り入ってその舍人となることができた。舍人というのは賓客に對する接待係であるという。

この時李斯がどれ程の年齢であつたか明かでない。併し彼はその後、始皇帝の治世三十七年を終え、次の二世皇帝の二年に殺されているから、若しこの時三十歳であつたと假定すると、その死は六十九歳の時になる。古代は概して平均壽命が現今より短かつたから、六十九歳まで長生きする人は少なかつた筈である。従つて李斯が秦に入つて呂不韋の舍人となつたのは、三十歳よりも若干年若かつたであろうと推定される。もしそうだとすると、彼の生年は従つて、前二七六年、秦の昭襄王三十一年から後の數年の間ということになる。

李斯は呂不韋からその才能を認められ、推擧されて秦の政府に移つて郎に任ぜられた。そこで直接、秦王に會う機會を得て、説くに天下統一の計を以てしたとあるが、恐らくこれは秦王が成人となつて冠を着し帶劔したという在位九年（前三三八年）以後のことであろう。これが大いに秦王を喜ばせ、李斯は長史に任ぜられて、軍國の機密に參預する身となつた。

ところが此處に思いがけぬ樁事が出來したというのは、彼のパトロンなる呂不韋が、個人的なスキャンダルに加えて、内亂に連坐して免職されたことである。

この呂不韋の恩顧を受けた李斯は、幸にして呂不韋の巻き添えにあうことを免れたが、これは彼の素早い身の振り方によつたものか、或いは拔目なく運動した結果か、或いはそもそも彼の身分が公式に政府官吏となつていたため、法律的に

何等問題がなかったのか、その邊のことは分らない。併しこの問題の餘波として、政府部内に、外國から秦に轉入してきた他所者の官吏は信頼できないから、そういう者を一切國外に追放しようという議が起り、所謂ゆる逐客令が發布されて、李斯もまたその中に指定されてしまった。李斯列傳ではこの逐客令の動機を、韓が秦に送りこんで水利工事を行わせ、秦の財政を疲弊させようとした鄭國の謀が暴露した結果だとしているが、鄭國の入秦は始皇帝嗣位の年のことであり、^⑨逐客令は即位十年の事件であるから、兩者を關係つけるには年代が隔たりすぎている。これは司馬光の「資治通鑑」に従い、逐客令を呂不韋失脚の餘波と見る方が適當であろう。

當時既に客卿の地位を得ていた李斯にとって、これは正に晴天の霹靂である。これまで辛抱を重ね、惡戦苦闘してきた努力が、今や水泡に歸しようという瀬戸際である。そこで李斯は必死になって、この逐客令の撤回を計って運動した。秦王に對しても上書して、この新令の不當なことを訴えた。それが逐客論である。秦王はこの李斯の言に動かされて、先の逐客令を取消し、李斯の官を復し、それから十六年の間に李斯を參謀として六國を次々に平定した。

承の段 秦王政即位の二十六年、六國の中の最後の齊を滅して、天下統一の大業が成就した時、李斯の官は、丞相、御史大夫に次ぐ廷尉に上っていた。この時李斯の年齢は恐らく五十五歳前後、そしてこれから約十年の間は彼が全盛を誇る黄金時代であった。

秦王政は一統の君主となると、王號を改めて皇帝と稱し、自ら呼ぶに朕を以てし、天子の死後に群臣が議して諡を定める例を廢して君主獨尊の體制を樹立した。この裏には法家思想の信奉者である李斯の獻策が與って大いに力あったことは容易に推察できる。

丞相王綰等が天子の一族を各地に封建して、皇室の藩屏にしようとして議した時に反對を唱えて、郡縣制を主張し、天下を三十六郡に分けることに結着させたのも廷尉李斯であった。但しこの時の李斯の上書は、始皇本紀に見える所で、列傳には漏れている。郡縣制は同時に劃一制を意味した。文字も度量衡も、はては車輛の軌幅までも、中央で定めたとおりのも

のを、地方の隅々まで遵依せしめた。秦の官製文字、いわゆる小篆の原典となっている蒼頡篇の上七章は李斯の作と伝えられる。但しこれは「漢書」藝文志に記載する所である。

天下統一の翌年、始皇二十七年から、地方への視察旅行、いわゆる巡狩が始まった。これは地方人民に對する示威運動の意味が含まれ、特に新領土に對しては中央に鎮座する皇帝の尊嚴無比なることを周知徹底させるためであった。度々の巡狩に李斯は常に隨行して、石を立て銘を刻して、秦の德を頌する儀に與った。この巡狩の記事も李斯列傳には殆んど省略されている。

始皇二十八年、巡狩して山東の琅邪臺に至って立てた刻石の列名を見ると、丞相隗林、丞相王綰の次に卿（廷尉）李斯の名があるが、それから六年たって、三十四年に朝廷で再び封建の議が出た時には李斯の位が丞相に進んでいた。始皇が咸陽宮において置酒した際、宴に與った博士七十人の中、齊人の淳于越が封建制の利を述べて始皇の反省を促したところ、丞相李斯は始皇の諮問に答えてこの議を反駁したが、更に進んで民間の私學が政府の施策を非議して世聽を惑亂する弊害を述べ、嚴重な思想統制を加えるべきを進言して裁可された。その統制の内容は、史官に藏する史書にして秦の記錄に非ざるものは皆なこれを燒き、博士の官が扱うもの以外、民間にある所の詩書百家の語を記したものは悉く官に提出させて燒却し、敢て偶語するものは棄市し、古代を崇拜して現今を非難するものは族誅する、という嚴しいものであった。書籍にして民間に私藏することの許されるのは、醫藥卜筮種樹の書であり、學問は従って法令の學が主となり、それは民間の師に即くを許さず、官吏について學べ、という趣旨である。

ここにおいて李斯の貴盛は並ぶ者なく、その身が位人臣を極めたのみならず、長子の李由は用いられて三川郡の守となり、他の諸子はみな秦の公主に尙し、女はみな秦の公子に嫁した。李由が三川郡から歸省した時、李斯はこれを迎えて家で置酒したが、百官の長は皆な伺候して壽を上り、門廷に車騎數千が盈ち溢れた。この時李斯は荀子から、「物は太だ盛んなるを禁ず」と教えられたのを思い出し、

斯は乃ち上蔡の布衣、閭巷の黔首にすぎなかったのに、今上はその驚下なるを知らず、拔擢して此に至らしめた。當今人臣の位、臣の上に居る者なし。富貴の極と謂うべし。物は極まれば衰う。吾れ未だ駕を税く所を知らざるなり。

と歎じた。この言葉を聞くと甚だ殊勝であるが、實はその謙遜めいた文句の裏に救いようのない驕傲の氣が匿されているのではなからうか。政治家が本來の任務をすっかり忘却して、ひたすら富貴に憧れ、その富貴を得てしまうと今度はどんな手段を講じてでも現狀を失うまいと執着するようになりがちで、そこに思ひかけぬ陷し筈が待ち構えているものだ。李斯の生涯は此處で危険な轉機を迎える。

轉の段 始皇三十七年、李斯は行幸に扈從して、今の浙江省の會稽に至り、海岸に沿って北上し、琅邪を経て、河北、山西から都に歸る豫定であった。李斯はこの時左丞相の位にあり、始皇の少子胡亥、宦官の趙高等と行を共にした。然るに河北省の沙丘臺まで來た時に始皇の病氣が急變して、生命危険の徵候が現われた。始皇もそれを自覺し、遺書を作成して、萬里長城の前線に監軍中の長子扶蘇に與え、軍隊を將軍蒙恬に委任して速かに都に歸り、始皇の喪を迎えるように命令した。不幸にもこの極祕の文書が宦官趙高の手にある間に、始皇が病死したから、此處に趙高の魔手が蠢動する機會が生じたのである。

趙高は始皇の側近を戒めて極力天子の喪を祕匿し、先ず少子胡亥に説いて、長子扶蘇を排除して代つて帝位に即くという陰謀に加擔せしめた。次は李斯である。本來ならば李斯は急遽前線の長子扶蘇、都に留守を預っている右丞相の馮去疾と連絡をとり、始皇の喪を護送して都に歸るべきであり、恐らくそうすれば何事も起らなかった筈である。併し李斯個人の立場を考えると、始皇がなくなってしまった今、馴染の薄い扶蘇が天子となれば、遠からずして自己は疎外されそうな氣配を感じずには居れない。その弱點を趙高に掴まれてしまったのである。

趙高からその陰謀を告げて加擔を求められた李斯は、最初は型通りの反對を唱えては見たものの、個人的な利害得失を

計算した上で決断を迫られると、本来優柔不斷な李斯は、易々と惡魔の甘言に乗せられてしまう。これには始皇帝の專制的な抑壓政治が、總ての政治家から自信と氣力を奪い去る結果を招いたこともある。もう六十歳を越え、事によれば七十歳の方へ近かったかと思われる老齡の李斯は、これまで始皇帝の下で單なる祕書官として働いて來たに過ぎなかったから、獨自の判断を以て積極的に行動するように慣らされていなかったのだ。これから後の李斯は魂をもたぬロボットのように、趙高の暗示を受けてその意のままに踊らされるのである。

趙高は胡亥、李斯と計り、始皇帝の遺書を握り潰して別に偽りの詔書を作り、これを前線の長子扶蘇、將軍蒙恬の許に使者を遣して送り届け、大軍を掌握しながら爲す所のなかった罪を責めて自殺を命じた。この場合も、從來の始皇帝の恐怖政治に慣らされた扶蘇は何等反抗の態度を表わすことなく柔順に自殺を遂げ、蒙恬は兵を解いて進んで囚れの身となった。この最大難關を突破した趙高等は雀躍りして喜んだ。彼等は始皇の柩を護送して都の咸陽に歸り、そこで喪を發して、胡亥を奉じて二世皇帝の位に即かせ、趙高、李斯の兩人が政治の衝に當ることになった。併しやがてこの兩人の間に罅裂が生じると、李斯はうかうかと誘われて趙高の設けた罠にかけられ、悲惨な最期を遂げる道のはうへ落ちこんで行く。

結の段 李斯の方はたとえ良心を喪盡しても身は朝廷の大臣であるから、政治の施設とその影響とについて、専門的な常識を具えており、限界を越えて遠く外れることを好まない。これに反し趙高は宦官であるから、その経験は狭い宮廷内の驅引きに止まり、天下の資源は恰も無限なもののように考え、私利私欲を計って私腹を肥せばそれだけ自己に有利だと思ひこみ、寄生虫が宿主の血を吸い盡して宿主が倒れば、寄生虫もまた斃れねばならぬことに思ひ至らない。ここに二世を挾んで、趙高と李斯との間に勢力争いが起るのである。

趙高が二世の信任を獲得するために、ひたすら放縱自逸の生き方を指導すると、李斯はこれに對抗するため、最初はこれに同調するかの如き言辭を弄して二世の歡心を維とうと試みた。そこに李斯に似合わしからざる幸樂を勸むるの上書がある所以である。

二世がその兄扶蘇を排除して即位したことは、已に死んだ始皇の威光を假り、詔書を偽造して行ったことなので、その真相が次第に知れ渡って行きそうになると、王族重臣の間に反抗の機運が盛り上ってくるのは當然の勢である。何よりもこの點を恐れた趙高と二世は、先手を打って反抗しそうな勢力を次々と肅清して行った。その爲には從來の法律では十分なので新たに酷法を制定して片端から容疑者を死刑に處した。公子十二人が咸陽の市で刑死され、公主十人が杜の社で磔刑に處せられた。大臣蒙氏はもちろん、有力者の誅滅される者が相繼いだ。秦の恐怖政治は始皇帝以前から存在したところであるが、刑罰を政治に利用するというやり方は、一度始めると際限なくエスカレートするものであるという原理は古今を問わず通用するらしい。

このような極度の抑壓政治が評判の良からう筈はない。惡評は階層を越えて擴がって行くものだ。趙高はそれが二世の耳に入ることを恐れた。暗愚な二世は自分も張本人の一人であることを忘れて、趙高一人に責を負わせて處分にかかるとも知れないからだ。趙高は又もや甘言を以て二世を誘い、宮中の宴遊に没頭させ、群臣を謁見させることをやめて、ただ趙高とのみ政治の相談を行い、裁決を彼に一任するに至る。すると首席大臣の李斯すらも位から浮き上り、容易に二世に近付くことが出来ぬようになってしまった。

二世と趙高との拙劣な政治は、たださえ不評であつた秦の政治に對する輿論の反抗を一層高揚させ、始皇が死んだ翌年、二世の治世元年七月には早くも陳勝、吳廣が叛旗を掲げて兵を集め、陳の故國の跡に據つて、國を張楚と號した。世にこれを陳王と稱する。

この報が咸陽に達すると、趙高は努めて事實を隱蔽し、二世に對しては、鼠竊狗偷の群盜で憂うるに足らずと報告したが、流石に李斯には事の重大さが理解できた。二世に謁見を申出ると、中間に立つた趙高は、殊更に二世が逸樂に耽つて高興を催した折を見計つて、李斯を參内させる。果して二世は怒つて、もう丞相の顔は見るのも嫌だと言ひ出す。正に趙高の思う壺なのである。

李斯としては國家存亡の瀬戸際に立たされ、もはや趙高と對決することが避けられぬと悟ったか、始めて上書して趙高の短を彈劾した。併しもう遅いのである。趙高の手中に丸めこまれてゐる二世は、反つて李斯を罪人扱いにして趙高にこれを按治させた。それには絶好の口實がある。それは李斯の長子李由が、三川郡の守となつて、陳勝等の叛軍と氣脈を通じてゐると言うのである。

秦の三川郡は、河水、洛水、伊水の三河によつて名を得たと言われるが、その疆域は判然としない。ただその名稱から考へて、現今の洛陽から開封あたり迄を含んだであらうと推定され、何時の世にあつてもこの地方は、政治的、軍事的に重要な土地である。その治所は滎陽、すなわち現今の鄭縣の少しく西にあり、従つて陳勝の張楚國とは近距離にある。その郡守李由が、境内を賊軍の横行するに任せ、一向に討伐を加えようとせぬのは、敵と通謀し文書を往來してゐるに違ひないという理由である。趙高は二世の旨を受けて李斯を訊問し、李由と共に謀叛した嫌疑によつて、拷問を加えて自白を強要した。

そこで李斯は獄中から上書して、その冤を訴えるのであるが、この文章は名文である。

先王の時、秦の地は千里に過ぎず、兵は數十萬のみ。臣は薄材を盡し、謹みて法令を奉じ（中略）、遂に六國を兼ね、其の王を虜にし、秦を立てて天子と爲せり。罪の一なり。地は廣からざるに非ず。又北は胡貉を逐い、南は百越を定め、以て秦の強を見わせり。罪の二なり。大臣を尊び、其の爵位を盛にし、以て其の親を固くす。罪の三なり。

以下、罪の七まで續いて、自己の功績を列舉して、二世の心を動かそうとしたが、中間に立っている趙高はこの上書をも握り潰して、上奏しなかった。反つて二世からの特命の使者、御史、謁者、侍中であると稱して自己の私人をやり、獄中の李斯を案問させ、李斯が希望を抱いて眞情を吐露すると、反つて其の度に懲治を受けて痛めつけられる。李斯の方ではこりこりしている時を見計つて、今度は本當に二世の使者が李斯の實情調査にやつてきた。李斯は既にあきらめてゐるので、これ以上の苦痛を避ける爲に、何を訊れても反抗せずに、嫌疑をかけられた罪狀をそのまま承認した。使者が李斯

の供述を持ち歸つて二世に示すと、二世は喜んで、すんでの所で李斯めに誑れるところであつたと、趙高の明察を賞した。二世の二年七月、李斯に死刑の判決が下り、獄中から引き出され、咸陽の市において腰斬に處せられた。李斯は同じ刑に問われた中子に向い、

吾れ汝と復たび黃犬を牽き、俱に上蔡の東門を出でて狡兔を逐わんと欲するも、豈に得べけんや。

と歎息し、相い哭して死についた。これに連坐して三族が皆な夷げられた。長子の李由はこれより先、楚の項羽のために攻殺されていた。

李斯列傳はこの後にエピソードがついていて、趙高が二世に對して鹿を馬と言ひ、遂には二世を弑して、その甥の子嬰を立てたが、子嬰は趙高を殺してその三族を夷げ、その子嬰もまた漢の高祖に降り、やがて楚の項羽に殺されるまでの経緯を記している。

三 上書五通の出處

上に述べた所で分るように、李斯列傳はあり合せの材料をただ年代順に列べたというのではなく、豫め敷設した軌道の上に、起承轉結の順を追つて李斯の一生を展開させた文學的な作品、一篇のドラマであると見てよい。ところで歴史と文學とはもともと性質の違ふものであるが、併し歴史の記述が文學的であつてはならぬという理窟はない。但しそれは何處までも、先ず歴史の約束を守つてからの上でのことであるべきは言うまでもない。

そんなら第一に李斯列傳は如何なる史料に基づいて書かれたが問題であるが、もちろん今日からこれを實證することは不可能である。ただやりようによつては、或る程度まではアプローチすることができないかと考えられる。

先ず李斯列傳の中には五件の上書が含まれている。列傳の本文には、その何れにも題目が附けられていないから、今便宜上、嚴可均の「全秦文」に附けられた題目を借用しようと思う。

(一) 上書諫逐客 これは普通に「逐客論」と稱せられ、「續文章軌範」など、諸種のアンソロジーに引用されている。

(二) 議燒詩書百家語 これは略々同文が始皇本紀にも載せられているが、始皇在位三十四年のことである。

(三) 上書對二世 二世に向つて逸樂を勧めた上書で、大臣の上書としては似合わしからざるもの。

(四) 上書言趙高 二世に對して趙高を彈劾したもの。

(五) 獄中上書 趙高との鬭争に敗れて獄中より二世に訴え、自己の功績を述べて二世の讞意を求めたもの。

さて後世の史書ならば、その中に引用された上書奏議の類は、概ね出所の正しいものとして、議論の正否は暫く措き、史料としては根本的なものとして高く評價されるのが常である。然らばこの李斯列傳の場合は如何であらうか。

この問題について一つの手懸りを與えるのが右の中の(二)である。と言うのは、これが始皇本紀の中にあるものと略々同文だからである。秦本紀及び始皇本紀は、恐らく漢の史官に藏せられていた秦記系統の史料に依る所が多いと思われ、果して然りとすれば、第一等の根本史料たるを失わない。但し史記はこの史料を採用するに當つて、一字一句を忠實に轉寫したのではなかった。何となれば今兩者を比較すると、重要な點に於いて彼此出入があるからである。

先に私が李斯傳記の概要を述べる際に、李斯が思想統制を獻議し、始皇の裁可を受けて實施するに至つた經緯を記した部分は、便宜上、始皇本紀の記載に據つたのである。今その統制の内容を更に詳しく述べれば、

臣請うらくは、史官の秦の記に非ざるものは皆之を燒かん。博士官の職とする所に非ずして、天下敢て詩書百家の語を藏する者あらば、悉く守尉に詣り、雜えて之を燒かん。敢て〔詩書を〕偶語するあらば弃市せん。古を以て今を非とする者は族せん。吏にして見知して擧げざる者は與に罪を同じくせん。

とあるが、李斯列傳においては、これに當る部分は甚だ短く、

臣請うらくは、諸の文學詩書百家の語ある者は、燬除して之を去らん。

とあるのみである。この下には更に續けて、

令下りて三十日にして焼かざるは、黥して城旦と爲さん。去らざる所の者は醫藥卜筮種樹の書なり。若し法令を學ばんとするあらば、吏を以て師と爲せ。

とあり、李斯列傳の文も略々同様である。兩者を比較すると、本紀の文が原史料の面目をよりよく傳え、列傳の文はこれに節略を加えたに違いないことが直に察知される。

なおこの前文に、本紀では今皇帝の三字があり、これは秦代の記録に屢々現われる表現で、今という副詞に皇帝の二字を添え、前代に對して秦代には、という意味を持たせたものである。然るに李斯列傳ではこれを、今陛下の三字に書き改めている。この時代には後世のように皇帝陛下と續ける用法がなく、陛下という字は皇帝という字の代替として用いられている。そして陛下という表現は、どうやら漢代になってから盛んに用いられるに至った言葉と思われる。この點からも李斯の上書(二)は、本紀の文の方が原文に近く、列傳の文はそれを轉寫したに違いないという傍證になると言えるであらう。

但し李斯の上書は司馬遷が直接秦記の如き政府所藏の史料に用いたかどうかには、なお疑問が残る。というのは漢代まで、もう少し二次的で便利な史料が存在していたと思われるからである。それは「漢書藝文志」春秋家の中に、

奏事二十篇（秦時の大臣の奏事及び名山に刻石せるの文なり）

とあって、これは秦代の歴史を書くには、正に打ってつけの史料ではあるまいか。そしてこのような種類の本が秦代に編纂されるべき理由が當時確かに存在した。それは始皇以來、學問とは當世に必要な實務の學習ばかりであるが、従つて將來や高級の官僚ともなろうとすれば、過去の大臣等が實際に上書した奏議、或いは刻石の銘文などを手本として習つておく必要がある。自分たちにも何時かは實地に應用する時が来るかも知れぬからである。従つて各官衙にはこのような書籍を教科書として備え付けておく必要があったと考えられる。既にそのような書籍が編まれるならば、李斯の上書などは最も適當な文例として、まづ先に採用されたに違いないのである。

このように考えてくると、(二)の上書は、別に政府史官の秦記のような貴重圖書に直接當らなくても、ここに擧げられた「奏事」二十篇、又はこれに類する書があれば十分に役に立ったと思われる。更に考うるに(一)上書諫逐客の文も同じ書籍の中に見出せたであろう。

李斯列傳の中には見えないで、反って始皇本紀の中に出てくる李斯の上奏に、議廢封建の一文がある。これは始皇二十六年に、天下一統の後、丞相王綰等が燕・齊・荊等の遠地に諸子を封じて王となさんと請い、群臣も大かたは賛成した中に、ひとり廷尉の李斯が反對を唱え、封建は行く行く天下大亂の原因になると申立てて始皇を諫めたのであった。この李斯の議なども恐らく、「奏事」二十篇の中に見出すことが出来たであろう。

そんならば李斯列傳中に見える他の上書もまた、確かな史料に基いた文章であろうかと言うと、實はそうは言えないのである。最も怪しいと思われるものから先ず問題としたいが、それは(伍)獄中上書である。

この上書は前にも一寸觸れたが、李斯が自己の功績を述べて、しかもそれを罪の一なりと數え初めて、罪の七に至っているものであるが、第一の罪の説明が非常に詳しく述べられているのに、第二以下はずっと簡單になり、ほんの概要に止まっているのは、前後アンバランスであるという感じを受ける。恐らく何か基づく所のある原文を轉寫する際に節略を加えたに違いないと思われる。それにしても全體として緊迫感を讀者に與える名文である。

ところが李斯列傳によると、李斯がこの上書を奉ると、趙高は吏をして棄去つて奏せざらしめ、囚人の身を以て安んず上書するを得ん、と言つたと言う。李斯がいま書いたばかりの上書が棄て去られたのならば、これは政府の史官の許に保管されることはなかつた筈である。この上書は李斯が殺される二世二年七月、若しくはその直前のことであり、翌年八月には二世が趙高に殺され、その翌九月には趙高も殺され、更にその翌月には沛公劉邦が咸陽に入つて秦王朝が滅びているが、このような動亂の際に、どうして一旦棄て去られた李斯の上書が残存する可能性があるだろうか。こう考えてくると、この上書は明かに後人の創作だと言わなければならない。

すると李斯列傳に載せられた彼の上書と稱せられる五通の中に、(一)上書諫逐客、(二)議燒詩書百家語のような、ある程度信頼すべき史料に依つたものと、(三)獄中上書のように、後人が當時の事情を推察して創作したものと二種類があることになる。そんならば他の二通の上書はその何れに屬せしめて然るべきであらうか。

二通のうち、(四)獄中上書に近い性質をもつのは(四)上書言趙高である。これも内容から見て、當時の權力者趙高に反對するものである以上、政府の史官に保存されよう筈はなく、また民間に流れて好事家の間に傳播しそうな機會ありとも考えられそうにない。やはりこれは(四)と同じく後人の創作に違いあるまい。

次は(三)上書對二世であるが、この内容は天子に逸樂を勧めるという所が珍無類である。更にその文章を檢べると、秦代らしからぬ表現が甚だ多いのが目につく。例えば、申韓之明術、能明申韓之術、雖申韓復生というような句があるが、申は言うまでもなく申不害で韓昭侯(前三五八—三三三年在位)に仕えたと言うから、李斯よりも百年以上も前の人である。それを彼と同門の韓非子と合せて申韓と稱するのは甚だ似合わしくない。

更に文中に、韓子曰、として二箇條を引用するが、韓非子の能を嫉んで之を死地に陥れたと稱せられる李斯が、上書の文に同輩の韓非子を引用するとは一寸考えられぬことである。

なおこの文中に世間の賢主と稱せられる名君の徳とは、死則有賢明之諡也、と定義しているが、秦は始皇帝が天子となると同時に、群臣が議して前君主に對し諡を贈る制度を廢したことは史上に有名な事實であるにも拘わらず、その時の朝議に與つた筈の李斯がこんなことを二世に對して言う筈はない。以上のような見地から(三)はどう考えても、李斯が實際に上書したものとは考えられず、實際は赤の他人、しかも相當年代の下つた人の手になる創作としか見られないのである。

そうかと言ってこの三通の上書が、皆な司馬遷の自作とも考えられず、彼は恐らく何等かの史料を利用して轉寫したに違いないと思われる。司馬遷は卓越した史家には違いないが、但し今日のような嚴密な史料批判の學はまだなかった上、史料が少ない時代であつたから、若し利用すべきものがあれば、あまり深い検討を加えることなく、そのまま「史記」の

中に取り込んだ例は甚だ多く、この場合に限ったことではない。

そんなら彼はどんな史料を利用したか、と言え、もちろん自信を持っては答えられないが、それらしい心當りがないではない。それは「漢書」藝文志、縦横家の中に

零陵令信一篇（秦の相李斯を難す）

とあるものである。もちろんこんな書は今日残っていない。信なる人物の姓すらも分つてはいない。併し察するところ、これは李斯の議論を先ず擧げて、次に著者の難、すなわち反駁を述べたものであらう。縦横家であるから必ずしも史實を頼りとせず、辯論の説得力を競う一種の創作であつてよい。藝文志の下文には縦横家なるものの性質を述べて、

邪人が之を爲すに及びては、則ち詐譖を上げて其の信を棄つ（師古曰く、譖は詐言なり）。

と言っている。恐らく司馬遷はこのような書の中から、李斯の議論とされている部分を探つたのであらう。

四 趙高とその三人の仇の物語

このようにして李斯列傳から上書五通を除いて見ると、あとに残るのは李斯の行事の梗概と、それに趙高との應酬である。そこで次に我々が検討を加えねばならぬのは、この列傳の大部分を占める趙高との葛藤は如何なる史料に據つて書かれたかの問題である。

ここで豫め考慮しておかねばならぬことは、李斯と趙高との間の問答は、祕中の祕、何人も他から伺うことを許されない極祕の相談が多いことである。始皇の死の直後、趙高は二世胡亥に勧めて奪嫡の計をなすのであるが、これは二人だけの間に極祕に進められた問答であつて、第三者は誰一人として與り聞くを得ない。當事者二人も後々まで、誰も他人に打ちあけられない。若し他人に感付かれただけでも重大な結果を惹き起すであらう。次に趙高は李斯を説きふせてこの陰謀に加擔させるが、この問答もまた兩人の間だけに限られたものである。李斯の合意を得ると、今度は二世と合せて三人

だけが共通の場を持つが、しかも三人以外に對しては絶対の祕密が保たなければならない。若し外部に洩れば三人とも致命傷を負わなければならぬ筈である。だからこの三人の間に交された問答は、到底史料として當時にも後世にも傳わり得ない性質のものである。言いかえればそれは創作に外ならない。

創作と見る時、この部分は讀者のサスペンスを誘うべく、甚だ巧妙に、また效果的に工夫されている。始皇の詔令を偽作して長子を殺し、少子胡亥を後繼者にしようという陰謀を打ちあげられた時、胡亥は決して卽座には承知しない。

兄を廢して弟を立つるは、是れ不義なり。父の詔を奉ぜずして死を畏るは是れ不孝なり。

と言って、徳義を振りかざして眞向から反對する。それは尤なことだ。若し胡亥がこの立場を押通せば、趙高の陰謀は根本から覆える。そうしたスリリングな場面を表わしつつ、趙高が懸河の辯を振ってまくしたて、形勢を盛返して結局惡事に加擔させるに成功する。次は李斯の番であるが、李斯も最初はやはり、

安んぞ亡國の言を得んや。此れ人臣の當に議すべき所に非ざるなり。

と撥ねつける。併し趙高が執拗に利害を述べて説きつけると、本來は優柔不斷な、書記的な才能しか持たない李斯は次第次第に軟化して屈服する。

嗟乎。獨り亂世に遭う。既に以て死する能わず。安くにか命を託せんや。

と歎息しながら、良心を賣渡してしまう。いったん惡魔の囁きに乘せられて、身を任した上は、彼の運命は急轉直下、奈落の底へ沈んで行き、もがけばもがくほど深みにはまって、最後は三族を夷げられるという悲劇に終るのである。

そんならこういう物語の作者は誰か、と言えばそれは外ならぬ民衆なのである。私の考によれば古代中國は都市國家的社會であり、漢代までは春秋時代の都市國家における古代市民的 생활が濃厚に残っていた。古代市民には社交場が必要であつた。その必要に應ずるのが市であり、都市における市は單に商品交易の場であつたばかりでなく、市民の憩いの場、娛樂の場であること、古代ギリシアにおけるアゴラ、ローマにおけるフォーラムの如きものであつた。

このような私の考に對して、それはあまりに西洋に引きつけた解釋である、というような非難を聞くこと屢々であるが、西洋に引きつけたのでなく、西洋と比較しただけである。若しも比較し損ったならば、もちろんそれは問題であるが、これまでその仕損った點を指摘されたことは聞いていない。抑も問題は、始めから左様な觀點を以て提起さるべきでない。人類が社會生活において要求する所は、西も東もそんなに違つたものではない筈である。古代人にも集會、社交、娛樂の場が必要なのは言うまでもないので、私はそれを探して市に外ならぬことを突きとめ、それが西洋の市の機能と甚だ類似していることが、結果として判明したのであった。

さて戰國・秦漢代の都會における市では、市民が集ると、其中の二人、乃至三人が役者となり所作事を演じ、科白を述べて、物語りを進行させて、民衆の喝采のうちに時間を潰した。これを偶語と稱した。偶語家が専門職となつて王侯に仕え、これを優と稱した。^④ 實は始皇の時代に、李斯の獻議で民間における一切の偶語を嚴禁したことがあつた。始皇本紀三十四年の條に

有敢偶語詩書樂市

とあるが、右の書は者の誤、詩は衍字と思われる。上から讀んで來ると、此處には是非とも者という字が必要であるが、先ずこれを書と誤つたのでそれでは意味が通ぜぬから、上文に詩書とあるのを見、意を以て詩字を補つたに違いない。果して「史記」卷八高祖本紀、漢元年十月の條に、高祖が咸陽に入り、父老に對して秦の苛法を述べた際に

偶語者樂市

と記しているがこれが正しい。さて偶語の意味は始皇本紀同條下の集解に、

應劭曰く、民の聚語を禁ず。其の己を誇るを畏るるなり。

とある。但し偶字が聚を意味するのではないので、正義には

偶は對なり。

と言っているのは、そのような誤解を避けんがためである。この兩條の言わんとする所は、偶語の文字の意味は對語、すなわち二人が相對して問答對話することであるが、實際には多くの人衆を聚めて聽衆とし、時にはそれが時事問題に及んで當路者を謗る結果になることもあった、と言うにある。

「史記」においては李斯列傳の場合のみならず、このような民間の説話をそのまま資料に用いた所が甚だ多いのであって、殊に内容が面白い話である場合において特に然りとする。

ところで李斯列傳は起承の二段と、轉結の二段とで、その雰圍氣が全然違うことは注意すべき現象である。何となれば後二段においては名目的の主人公は李斯でありながら、實際に活躍するのは趙高であり、李斯の方は頗る生彩のないワキ役を勤めているに過ぎない。とすれば司馬遷はいつたい如何なる種類の偶語を資料として用いたのであらうか。どうやらその物語は李斯が主役ではなかったらしく思われるのである。

もう一つ、李斯列傳の後半、轉結の二段において、主役を奪つて活躍する趙高の性格であるが、それが惡役であるからには致し方ないとしても、あまりにも惡魔的に描かれているのは何故かという疑問が生ずる。例えば二世が即位した後にその兄を迫害するが、二世本紀においては

六公子は杜において戮死せられ、公子將閭昆弟三人（中略）、皆な流涕し劍を抜いて自殺す。

とあるだけであるが、李斯列傳の方には

公子十二人は咸陽の市に磔死せられ、十公主は杜に磔死せらる。

と記している。二世や趙高が自己の地位を安全にしようとする氣持は分るにしても、これでは過當防衛と言わざるを得ない。或いは反つて反動を生じて危険な事態に立至るかも知れぬと思われるのに、何故こんなことをする必要があったか。

李斯の最期についても同様である。

斯に五刑を具えて論じ、咸陽の市に腰斬す。

とあるが、この中の具五刑とは、「漢書」刑法志に

當に三族すべき者は皆な先ず、黥し劓し左右の趾を斬りて之を笞殺し、其の首を梟し、其の骨肉を市に蒞す。其の誹謗詈辱する者は又た先ず舌を斷つ。故に之を具五刑と謂う。

とあり、あらゆる苦痛を與えた後に答うて命を絶つが、李斯の場合は笞殺の代りに腰斬されたのである。趙高と李斯との間に、何故にこのような酷刑を加えねばならぬ怨恨があったのであろうか。どうも單なる宦官のコンプレクスだけでは説明できない嗜虐性と言うより外ないが、そんならこの嗜虐性は何處から來たのであろうか。

李斯列傳の後半に主人公的な役割を占める趙高は、何の前觸れもなく忽然と出現するが、實は趙高の素性は、同じく趙高の爲に犠牲に供せられた蒙恬の列傳中に記されている。私はそこで、趙高は實は秦に滅された趙の一族であつたという記事を見て、豁然として悟る所があつた。趙高こそは疏遠ながら趙の王族の末裔として、秦に對して亡國の恨を晴らしたに違ひないのだ。ここにもう一つの「趙氏孤兒雜劇」があつたのだ。

「史記」蒙恬列傳によると、

趙高者。諸趙疏遠屬也。趙高昆弟數人。皆生隱宮。其母被刑髡。世世卑賤。

とあり、此に諸趙と言うのは、齊の王族を諸田と言うように、趙王の一族の意味である。生隱宮の三字を、「史記索隱」では、隱宮に生る、と讀んだ。そこでその意味を解して、

劉氏云うならく、蓋し其の父、宮刑を犯し、妻子沒せられて奴婢と爲る。妻後に野合し、生む所の子皆な趙姓を承け、並びに之を宮す。故に兄弟隱宮に於いて生る、と云うなり。

と言ひ、これは意味が判然しないが、恐らく没入されて女奴隸となつた母が、隱宮という場所に入れられ、次々に父なし子を生んだが、前夫の姓によって、その子も趙氏を名乗つた、と解しているものの如くである。すると今度は列傳本文の下文に、母が髡刑を被る、とあるのと時間的に如何に續くかの問題が起る。一たび奴隸とされ、子を幾人も生んだ後に更

に刑死させられたのでは念が入りすぎる。本文だけを讀めば、そんな複雑な意味が出て來そうには思えない。實は生隱宮の三字の下の集解には、

徐廣曰く、宦者と爲す。

とあり、これは隱宮の二字を解したものとされる。恐らくこの解釋に従って「資治通鑑」卷七、秦紀始皇三十七年の條には、この文を

生而隱宮（生れて宮に隠せらる）

と讀んでいる。隱宮の二字は實は「史記」始皇本紀三十五年の條に既に出てゐるもので、その下の正義には

餘の刑は市朝に於いて見す。宮刑は一百日陰室に於いて隠せられ、之を養つて乃ち可なり。故に隱宮と曰う。蠶室に下すとは是なり。

とあり、つまり隱宮の二字は、名詞に讀めば隱するの宮となり、動詞句に讀めば宮に隱するの意となるので、「資治通鑑」は後の意味に取り、蠶室に下す、と同義だと解したわけである。すると趙高の昆弟は數人あったが、生れながらにして、言いかえれば生れると間もない時に宮刑に處せられたのである。但し昆弟數人は皆な同腹とは限らない。だから趙高の母について言えばこれと同時に死刑に處せられたと説明を附け加えた。従つて索隱の劉氏が昆弟數人を皆な同じ母が次々に生んだと解したのはそこに非常な無理がある。

そんならば趙高のこの幼時の災難は如何なる事情の下に起つたかと言えば、もちろん確かなことは言えないが、それを推察せしめる事件の記録はないではない。始皇本紀十九年の條に秦軍が趙を滅し、趙王遷を捕虜とした記事の後に、

秦王邯鄲に之を、諸の嘗て王が趙に生れし時の母家と仇怨有りし者を、皆な之を阮にせり。

と記している。抑も始皇帝の父莊襄王は質子として趙に送られ、甚だ失意の中に日を送っている中、豪商呂不韋に認められ、呂不韋から一姫を贈られ、その腹に出來たのが始皇帝であつて、或いは呂不韋の子であるとも言われた。この舞姫は

邯鄲蒙家の女とも稱せられるが、普通の常識で考えるならば、奴隸と同じ條件で賣られたに違いないから、貧家の子であつて苦しい境遇に育つたと思われるのである。始皇帝の出世と共にこの舞姫は太后となり、苦難の前半生を送つた趙の地を征服し、嘗て自分に辛く當つた仇人に復讐を遂げたと言ふのである。しかもこの直後に舞姫太后は死んでゐる。前後を併せ考えると、趙高の母が殺され、自身も宮刑を受けたのは此時のことではないかと思われる。

果して然りとすれば趙高にとっては、始皇帝、並びにその宰相李斯は不倶戴天の仇である。單に祖國趙の仇であるばかりでなく、自分自身の母、事によれば父にとつても、また自己の宮刑恥辱を與えた仇でもあつて、憎んでも憎みたりない存在である筈である。そこで趙高がひたすら秦の滅亡を希い、始皇帝の子供を兄弟同士殺しあいさせ、公主を磔死させたり、更には李斯を殺すにも五刑を具えた上で腰斬するなど、極度の酷刑を用いた理由も、どうやら理解できるではないか。

趙高は蒙氏に對しても敵意を抱く理由があつた。それは「史記」が説明するように、嘗て趙高が大罪を犯した時に、蒙毅が法によつて之を治め、高に死罪を當てたことがあつたからと言ふだけではないらしい。それは戰國末期における秦と趙との戰において、趙に向つて攻めてきた將軍は蒙驁であつた。殊に莊襄王の二年、彼は趙を攻めて三十七城を取り、始皇即位の初に晉陽が叛した時、これを平定したのも蒙驁であつた。彼は始皇七年に死んだが、その子が蒙武であり、蒙武の子が蒙恬と蒙毅の兄弟である。

蒙驁が死んだ後、趙方面の經營に當つた秦の將軍は王翳であるが、蒙武はその下で働いてゐたと思われるふしがある。何となれば彼は父の下で三晉の事情を學び、地理に通じていたに違ひないので、王翳にとつて有力なブレインたり得るからである。後に王翳が楚を平定する大任を與えられた時に、副將に選抜したのは蒙武であつたことを見ても、兩人のコンビはずっと古くから存在していたものと考えられる。果して然らば趙を平定した後に、始皇帝自ら邯鄲に乗りこんで斷行した虐殺に際して蒙武がその實施に参加したであらうという推測も決して不當ではない。趙高は始皇の長子扶蘇に連坐させ、蒙恬に迫つて自殺せしめ、併せてその弟蒙毅を殺した。こうして趙高はその仇とする始皇帝、李斯、蒙驁の三家に對

して徹底的な復讐を遂げたのである。

李斯列傳に見ゆる限りにおいては、趙高は只の宦官ではない。大帝國の丞相ともあろう李斯を手玉にとって愚弄し、二世のような暗愚な君を背景として百官を畏服した。だから蒙恬列傳を見ると、趙高はその強力にして獄法に通ずる故に始皇に登用され、嘗て罪を犯して宦籍を除かれたるに拘わらず、その事に敦きを以て、赦してその官爵を復せられたと言う。趙高自身も自ら刑餘の戮民を以て居らず、宛として趙王の遺孽を以て自ら任じていたらしい。されば二世を弑した後に彼は自ら帝位に登ろうと試みたとある。李斯列傳に趙高が兵を以て二世に迫った際、

劫して自殺せしめ、璽を引いて之を佩ぶ。左右百官従うもの莫し。殿に上るに殿壞れんと欲する者三たびなり。高自ら天の與せず、群臣の許さざるを知り、乃ち始皇の弟を召して之に璽を授く。

と記している。右の文中、始皇の弟とあるは孫字の誤ではないかなどと論ぜられているが、これは單に璽を保管せしめたと見れば、弟でよいのではないかと思われる。何となればこのすぐ下文に、子嬰が位に即いたと記しており、この子嬰は始皇本紀の方にはっきりと、二世の兄の子、公子嬰と書いているので、ここで別に説明を加える必要はなかったのである。このような明白な事實について、「史記」が誤を犯す筈はないであらう。

始皇本紀によると子嬰は趙高に擁立されたが、その眞意を疑つてその二子と謀り、

丞相高は二世を望夷宮に殺し、群臣が之を誅せんことを恐れ、乃ち詳いっりて、義を以て我を立てたり。我聞くに趙高は乃ち楚と約し、秦の宗室を滅して、關中に王たらんとすと。

とあって、恐らくこのような風聞も實際にあり得たことなのであらう。天下の皇帝でなければ、せめて關中の王になりた。やはり趙高は只の宦官でなく、「趙氏孤兒」であつたのだ。

五 荀子とその三人の弟子の物語

司馬遷は李斯列傳を著わすに當り、無名氏が偶語によって演ずる所の「續趙氏孤兒雜劇」又の名は「趙高とその三人の仇の物語」を粉本として用い、その後半部を纏め上げたらしいことは上述する所によって、略々推測され得たと思うが、そんならばその前半部にも同様なことが行われなかったであろうか。私の考える所では、それは大いにあり得たことであり、やはり同様な偶語風の物語が、下書きとして用いられた形迹を辿ることができると思う。そしてこの場合の粉本の名は「荀子とその三人の弟子の物語」とも名付けらるべきものであったらしい。

李斯列傳の前半部には荀子の影が所々に映されているが、この荀子はやはり純粹の儒家的立場から見た學匠の荀子でなく、偶語中に利用され、引合に出された荀子である。そして同様の性質をもつ荀子と弟子たちの物語の斷片が漢代の諸書に散見しており、此等の斷片を接續すると、史料として司馬遷に提供してもよさそうな一篇の故事談が成立しそうである。

三人の弟子と言うのは、李斯と韓非子と、包丘子（又は鮑丘子）とのことである。この三人は荀子の門に入って一緒に學ぶのであるが、その學問の目的は夫々互いに全く相異なる。先づ李斯は權勢欲が盛んで、天下を以て己の任となし、そのためには何よりも立身出世が必要であり、この目的の爲には手段を擇ばない。次に韓非子は韓の一族であり、貴族社會に生長したところから、何よりも名譽を追求する。不幸にして口が吃りであったので、書を著すことに専念して世に知られようとした。師の荀子から見ると、最も才能が優秀で頭腦の明晰な李斯と韓非子とを自分の學問の後繼者としていたのであるが、二人の方は氣が多すぎて本氣に學問をしようという氣にならないのが惱みの種である。もう一人の包丘子は眞面目に學問に沈潛する根氣はあるが、いちばん頭が悪そうである。

まづ先きに荀子の許を飛び出したのが李斯である。恐らく荀子は一應はそれに反對して見たのであろう。その際に李スが押し切つて荀子に辭した時の言葉らしいのが、李斯列傳の初の所に載せられている。

荀子の許を去つて西のかた秦に入り、呂不韋の舍人となつて秦王に會う機會を得、そこで大いに説くに帝王の術、天下

統一の計を以てしたが、その言葉も李斯列傳中に收められている。

その次は有名な逐客令に對する李斯の反對の上書であるが、本文下の索隱に引用された劉向の「新序」には、斯も逐中に在り。道上に諫書を上り、始皇に達す。始皇人をして逐わしめ、驪邑に至りて還るを得たり。

とあるが、國境を越える前の間一髪で間にあったというのは、好んで偶語に用いられる技巧である。

次に荀子の許を去ったのは韓非子であり、彼は積弱の韓が、日に日に鄰國の秦に領土を蠶食されるのを見るに忍びず、頻りに韓王に獻議して國政の建て直しを計ったが、一向に用いられず、最後に滅亡の土壇場になって、韓王は韓非子を召し、秦に使し秦王に説いて韓を存續せしめようと計った。併しその使命は失敗に終り、韓非子は自殺し、その三年後に韓も滅亡に追いこまれたのである。

「史記」卷六三、老莊申韓列傳の韓非子は、李斯の爲にその才能を嫉まれ、その謀計によって自殺を迫られたことになっている。この部分の記載は、李斯列傳の記載と相應して、甚だ偶語的な特色を持っている。

李斯と俱に荀卿に事う。斯は自ら以て非に如かずと爲せり。

人或いは其の書を傳えて秦に至る。秦王「孤憤・五蠹」の書を見て曰く、嗟乎、寡人此の人を見、之と遊ぶを得ば、死すとも恨みざらん、と。李斯曰く、此れ韓非の著す所の書なり、と。秦因て急に韓を攻む。韓王始め非を用いず。急なるに及びて廻わち非を遣わして秦に使せしむ。秦王之を悦ぶも、未だ信じ用いず。李斯、姚賈之を害とし、之を毀りて曰く、韓非は韓の諸公子なり。今、王諸侯を并せんと欲す。非は終に韓の爲にし、秦の爲にせざらん。此れ人の情なり。今、王用いず。久しく留めて之を歸さば、此れ自ら患を遣すなり。如かず、過法を以て之を誅せんには、と。秦王以て然りと爲し、吏に下して非を治せしむ。李斯人を使わし、非に藥を遣り、自殺せしむ。韓非自ら陳べんと欲して見ゆるを得ず。秦王後に之を悔い、人を使して之を赦せしめしに、非已に死せり。

韓非は説くことの難きを知り、「說難」を爲る。書甚だ具わるも、終に秦に死して、自ら脱する能わざるなり。

これを讀むと、李斯と韓非子は同門のライバルであつたこと、秦王が韓非子を賞めすぎて一層李斯の競争意識をかきたてたこと、「說難」を著して遊説の困難を説き、百も知り盡していながら、遊説先で死んだことを述べるが、最後に秦王の赦免を受けながら、一足違いで間にあわなかつたことは、李斯が秦王の使に追いかけられ、やつと驪邑で間にあつたのと好一對をなしていて甚だ面白い。これは兩者が根原を同じくしていることを物語る證據だと言えるであらう。

韓非子の自殺は始皇本紀によれば始皇十四年（前三三三年）のことであり、李斯が逐客論を上つた時から僅に四年の後に過ぎず、李斯はまだそんなに重用されてはいなかったから、彼が韓非子を陥れたというのは、一説として傳えらる所に過ぎなかつたと思われる。だから一方には、李斯が後に丞相になつたと聞いて、荀子が心配のあまり、食を廢したという傳えがある。

「鹽鐵論」毀學第十八に、文學の言として、

李斯の秦に相たるに方^{あた}つてや、始皇之に任じ、人臣二なし。然り而して荀卿之が爲に食わす。其の不測の禍に罹るを親んとなり。

とあり、同時に李斯列傳によれば、彼が得意の絶頂にあつた時にも、荀子の言葉を思い出して反省している。

曰く、嗟乎、吾れ之を荀卿に聞く。曰く、物は太だ盛んなるを禁ず、と。

これで見ると、若し李斯が韓非子を陥れたにしても、荀子はそんな事とは知らず、相い變らず、李斯を忠實な弟子だと思つていたことになっているのである。但しそれが歴史事實に合うか、どうかは別問題で、李斯が丞相に任ぜられた頃には、荀子はもう此世には居なかつたのが事實と思われる。

荀子の第三の弟子、包丘子については、前に引いた「鹽鐵論」毀學篇が殆んど唯一の史料であるが、これもどうやら偶語から出たもので、しかもこれを合體させることによって、李斯、韓非子の説話が完成するらしいのである。同書には先ず政府側の大夫の言として、

昔、李斯は包丘子と俱に荀卿に事う。既にして李斯は秦に入り、遂に三公を取り萬乘以據つて以て海内を制す。功は伊望に伴しく、名は太山よりも巨いなり。而して包丘子は甕牖蒿廬なるを免れず。潦歳の寵の如くして、口衆からざるに非ざるなり。然れども卒に溝壑に死するのみ。

これに對して民間輿論を代表する文學の側は人間の生き方において、李斯よりも包丘子を選ぶべきことを主張する。

包丘子は麻蓬藜を食ひ、道を白屋の下に修め、其の志を楽しみ、之を廣厦瑤象よりも安しとす。赫赫の勢なきも、亦た戚戚の憂なし。

李斯が秦に相として天下を席するの勢あるや、志は萬乘以小なりとす。其の囹圄に囚われ、雲陽の市に車制（裂？）せらるるに及んでは、亦た薪を負いて鴻門に入り、上蔡曲街の徑を行かんとするも、得べからざるなり。

とあつて、この最後の條は李斯列傳の結びと、殆んど同一である。

右の包丘子は或いは「漢書」卷三十六、楚元王傳に見える浮丘伯と同人かとも思われるが、果して然らば、これは魯の申公の師であつて、詩經の傳受において重要な役目を果たしたことになる。この浮丘伯が荀子の弟子であつたことは事實であつて間違ひなく、それが秦の滅亡後、約二十年を経た呂后の時代まで生きており、長安に出て弟子に教えたと言うから、健康であり且つ長壽であつたと思われる。

若し私の推理に誤がなければ、「荀子とその三人の弟子の物語」は偶語として、李斯と韓非子と包丘子と、三人三様の人生觀を描いて世を諷刺したものである。李斯はひたすら權勢を熱望して秦の丞相となり、韓非子はもっぱら名聲を追求して天下の名士となつたが何れも非業の最期を遂げた。ひとり包丘子は貧賤に甘んじて名利に惑わされず、恐らく李斯や韓非子にその無能を嘲笑されながら、よく學問の孤壘を守り、動亂の渦中であつて、天壽を全うすることができた。さてどれが本當の人間の生き方かと問ひかけるのである。

司馬遷はこの偶語を人に従つて三部に切斷した。韓非子の分は老莊申韓列傳に書きこんだが、この部分が最も本來の面

目を保っていると思われる。李斯の分は李斯列傳の前半の下書きに使用したが、韓非子との關係は重複を嫌って一切觸れず、荀子との關係も半面を伝えるに止めたので、全體として甚だ不十分な書き方になったのを免れない。包丘子の分は全然削除して用いない。波瀾のない人生は傳を立てても面白くない上に、司馬遷は隱遁者を最上の人生として贊美する價值觀には共感しなかったと思われるのである。

六 結 語

李斯列傳は形式としては起承轉結のリズムを完全に具え、その對象は天下統一の大業を輔佐した大政治家であるのだが、さて正直のところ、これを讀んでも大した感興を覺えず、また李斯という人物の印象もあまり判然とは浮び上ってこない。いったいこれは何處に原因があるのだろうか。

由來司馬遷は不世出の名文家とされて來たようであるが、私はこれには無條件には贊成しかねる。というのは司馬遷の文章の出來榮えには非常にむらがあるからである。その良否の據つて來る所を考えると、それは彼が利用し得た資料の如何に懸っていると思われる。もしその材料が良かった時には、自然にその出來上りも優秀であるが、もし欲する所の資料が思うように揃わなければ、その仕上げも從つて不十分になるのは、別に司馬遷に限ったことではなく、歴史學というものの持つ不可避な宿命とも言えるであらう。

私が試みた分析に従えば、李斯列傳に用いられた資料は大別して四種類ある。第一は比較的信頼すべき公文書の流れを汲む「奏事」二十篇の如きもの、第二は秦漢の交に作成された縱橫家流の著述で、事實よりもむしろ議論に重きをおいた「零陵令信」一篇の如きもの、第三は民間で語られた偶語のうち、趙高を主人公とした復讐物語、私が名付けて「續趙氏孤兒」又は「趙高とその三人の仇の物語」とでも言うべきもの、第四は同じく偶語の系統で「荀子とその三人の弟子の物語」とも言うべきもの、以上の四種である。非常に性質の違った四種類資料を雜然と寄せ集めたために、李斯列傳は全

體として粘着力を缺き、内容的に首尾呼應していない。しかも前半は「荀子と三人の弟子」、後半は「趙高と三人の仇」という風に異った粉本を用い、しかもその何れもが、原本においては主人公の位置を占めて居らぬワキ役であつたものを、そのまま持ちこんでシテ役を勤めさせたため、甚だ落着きが悪い。

殊に問題なのは李斯列傳の後半を讀む時、「趙高とその三人の仇」の偶語における語り口がそのまま再現されているような感じを受ける點である。いったいこの物語が市井で演ぜられる時、談者と聽衆との同情は何方に傾いていたであらうか。恐らくそれは趙高の方ではなかつたか。それは最初の被害者であり、仇を討つ側であつたからだ。漢初の人民の身體にはまだ古代都市國家人の自由な血が流れていた。特に秦の始皇帝という抑壓者に對する反感がまだ忘れずに残っていた筈である。

ところが司馬遷の立場はこれと異つていた。司馬遷にとつて、趙高は何處までも秦の後宮に奉仕する一宦官で、従つてその行爲は大逆不道であつた。若しも司馬遷が純然たる民間人であつたならば、彼は大いに趙高に同情してもよかつた。何となれば彼は趙高と同じように宮刑に處せられ、最大の屈辱を受けたからである。或いはそれなればこそ、うっかり趙高に同情を表わしては、自身が武帝に對し怨望を抱いたとの嫌疑を受けるかも知れぬと恐れたのであらうか。彼にとつて趙高は、これを「趙氏孤兒」たらしめてはならなかつた。そこで原本を二部に分け、李斯列傳においては、あれほど重要な役割を占める趙高が、何の前觸れもなく全く突然に登場し、登場したと思うと殆んど獨りで舞臺を占領する。趙高の出自は蒙恬列傳の方にまわされるが、此處でも彼は「趙氏孤兒」となつて復讐する權利を拒否されている。

趙高なる者は、諸趙の疏遠の屬なり。趙高の昆弟數人、皆な生れて隱宮され、其の母は刑僇せらる。世世卑賤なり。

この最後の世世卑賤の四字は何を意味するか。上文にある疏遠の屬だけでよさそうに思えるのに、わざわざこの四字をつけた司馬遷の眞意はと言へば、そんな身分であるからには、趙のために復讐するような權利は全然持つていなかったと宣告するにあつたと思われる。このあたり、司馬遷と一般大衆との間には大きな感情のずれがある。司馬遷は大漢帝國の

太史令である。エリート官僚として矜持は、宮刑の屈辱によって張消しにされるような安っぽいものではなかったのである。

漢王朝は秦を滅して興った帝國であるが、その大統一を成就した點において共通の面がある。だから司馬遷は始皇帝を輔けて統一事業を遂行せしめた謀主、李斯のために列傳を立てねばならなかった。ところが實際に當って見ると、これまでに李斯を主人公に据えた纏った資料がない。そこで種々の性質の異ったものを寄せ集めて書き直さなければならなかった。さて出来上ったのを見ると、我ながら面白くない列傳になってしまったと思ったであろう。この司馬遷の當惑は卷末の贊によく現われている。あれだけの大業を建てた筈なのに、李斯の悪い面ばかりが出ているからである。すなわち前半では、折角大儒荀子の門に出たにも拘わらず、法家の學に轉向してしまう。

六藝の歸を知りながら、政を明かにして以て主上の缺を補うを努めず、爵祿の重きを持し、阿順苟合し、嚴威もて酷刑す。

ついで始皇が死んだ後には、

高の邪説を聴き、嫡を廢して庶を立つ。諸侯已に畔いて、斯乃わち諫争せんと欲するは、亦た末ならずや。

と、李斯の過失を擧げるが、併し司馬遷はこれを以て、その本質的な失敗とは見ていなかったらしい。だから最後に、然らずんば、斯の功は且つ周・召と列せん。

と結び、もう少しで周公、召公と並び稱せられる所だと評價している。更に言いかえれば、世世卑賤なる趙氏孤兒や、荀子の弟子の貧乏な隱者とは次元の異なる世界の人だったと言うことになる。この司馬遷の貴族主義、エリート意識は、班固に引きつがれて更に甚しくなっていくのである。

史記列傳の中において、最もよく李斯列傳に似たものを求めれば、商君軹列傳、伍子胥列傳が擧げられるであろう。何れも本國において志を得ず、若しくは迫害を受けて異國に入り、そこで孤軍奮闘して漸く地歩を築き上げ、一時は大いに

志を得て功業を樹立するが、最後には思いがけない破局に陥って身を滅すに至るので、その経歴がそのまま起承轉結の波動に乗って進んでいるのである。

この中で最も生彩のあるのが、伍子胥列傳の文章である。その物語が最も劇的であって、少時の迫害の酷虐、流浪の慘苦、痛烈なる復讐、そして最後に自身の悲壯なる最期、これだけでも自然に樂器が鳴り出して伴奏を奏するであろう。だが待てしばし、これはいったい何處まで本當の史實だったのであろうか。若し伍子胥の呉への亡命が事實であつたとしても、伍子胥が居なくとも呉王僚の暗殺は起り得たであらうし、また伍子胥が居なくとも呉軍の楚に對する進攻は起り得たであらう。伍子胥は必ずしも此等の事實における必須の要素ではなかつたかも知れない。この物語はむしろ偶語家の創作ではなかつたか。そして時代が春秋末という古い時代に設定されているために、戰國末乃至秦漢の偶語家は、史實に束縛されることなく、自由に空想を働かせて創作することが出来たのではないか。そして司馬遷はその結果たる優秀な創作をそのまま史料として利用する僥倖に恵まれたものではあるまいか。ところが時代が下れば下るほど、明かな歴史事實からくる制約が多くなり、従つて文學的でなくなってくる。その實例が李斯列傳なのである。

伍子胥列傳の末尾の論贊において司馬遷は彼自身の君臣關係觀を述べている。

怨毒の人に於けるや甚だしい哉。王者も尙お之を臣下に行う能わず。

他人から怨恨を受けるような行爲は、王者でも臣下にしてはなりません。これが武帝によつて屈辱を與えられた司馬遷のせいといふの抵抗だったのである。この下文に、

向きに伍子胥をして、（兄）奢に従つて俱に死なしめば、何ぞ螻蟻に異ならん。小義を棄てて大恥を雪ぎ、名は後世に垂る。悲しいかな、子胥が江上に窘しみ、道に乞食するに方りて、志豈に嘗て須臾も、郢を忘れんや。故に隱忍して功名を成す。烈丈夫に非んば、孰か能く此を致さんや。

とあって、伍子胥の復讐を認める發言をしている。伍子胥は楚の名族であつたので、世世卑賤なる趙高などとは違った人

種だったのだろうか。

冒頭に述べたように「史記」は文・史の未だ分離せざる作品である。だからこれを研究するに、現在の歴史學の考えを以てして、たとえどんな鋭い理論を以て立ち向ったところで、それは暖簾に腕押し、一向に手應えがないだろう。さりとてその文學的な面だけを重視して、司馬遷の個人的な環境、その心情ばかりを頼りとして、情緒的に本體を掴もうとしては、出てくるものは司馬遷個人であって「史記」ではない。何となれば「史記」は文學的と言うよりは、より多く歴史的な作品であるからだ。そして我々としては特に司馬遷の歴史家としての苦心を没却すべきではない。

「史記」を研究するには、何よりも「史記」をして「史記」を語らしめるより外によい方法はない。そのためには、廣く表面を掘り返すよりは、此處ぞと思う地點を見つけて、出来る限り深くボーリングを試みる方がよい。深く掘るには絶えず周圍からの土崩れを防ぐ用意も必要だ。そして壊れ易い土器をなるべく原形のまま掘り出そうとする時、最後へ行つていちばん必要なのは、金屬製のスコップよりは柔い人間の手だということになる。こちたき理論よりも、身體を張つて得た経験によるカンが大切だと言いたいのである。「史記」のような得體の知れぬ古典になると、研究の対象となつてあげつらわれているのは「史記」であるが、實はそれ以上に問われているのは研究者自身の人間であると覺悟しなければならぬであらう。

註

① 私の起承轉結についての考は、拙稿、東風西雅錄四（平凡社「中國古典文學への招待」所收）に簡單に述べてある。

② 韓の鄭國の入秦の年は、「漢書」溝洫志から逆算するがよい。「資治通鑑」秦紀はこれを莊襄王が死んで、始皇帝が嗣いだ前二四七年にかけている。

③ 私の都市國家についての考は、支那城郭の起原異説（アジア史研究 Ⅰ）

中國上代は封建制か都市國家か（アジア史研究 Ⅲ）
中國古代史概論（アジア史論考 上）
戰國時代の都市（アジア史論考 中）

④ 偶語、優などについての私の考は
讀史劄記—史記優孟傳（アジア史研究 Ⅰ）

東風西雅錄—倡優（平凡社「中國古典文學への招待」所收）
身振りと文學（アジア史論考 中）

On Reading the Biography of Li Ssu 李斯 in the *Shih-chi* 史記

Ichisada Miyazaki

When Ssu'ma Ch'ien 司馬遷 wrote his *Shih-chi*, in addition to chronicles which had been passed down since antiquity, he made use of stories from the oral tradition which were told in public by men of the time. This biography appears in the *lieh-chuan* 列傳 section, but there are many instances in which Ssu-ma Ch'ien selected only the needed part of an established story for his purposes. However, by collecting the fragmentary historical materials from the records of the Han 漢 Dynasty, we can reconstruct the original form of the stories which Ssu-ma Ch'ien disassembled. Ssu-ma Ch'ien made use of two stories in writing the biography of Li Ssu. One was a story in which the main character was the eunuch Chao Kao 趙高 who was a descendent of the king of the state of Chao 趙 which had been destroyed by the Ch'in 秦; and he successively took revenge on his enemies, Ch'in Shih-huang 秦始皇, Prime Minister Li Ssu, and General Meng Wu 蒙武. The other story concerns Hsün-tzu 荀子 and his three disciples, Li Ssu, Han-fei-tzu 韓非子, and Pao-ch'iu-tzu 包丘子. Li Ssu who had a strong craving for power became prime minister of the Ch'in, but later lost his position and was killed. Han-fei-tzu won fame for his writings, but when he went and expressed his views to Ch'in Shih-huang, Li Ssu became jealous of him and had him killed under false pretenses. Pao-ch'iu-tzu became sincerely devoted to scholarship and was poor throughout his entire life; he died peacefully, and his scholarship was passed on to later generations. This is a didactic story which questions which of these three men's different life-styles is the very best. What we should pay attention to is that in these two stories Li Ssu does not play a main role, but only a supporting role. We can see that the weakness of Li Ssu's supporting role as described here was carried over without change into the biography of Li Ssu in the *Shih-chi*.